

第6回中之島映像劇場

ビル・ヴィオラ初期映像作品集 心の旅路

Bill Viola Early Video Works 1979-1986: Journey into the Mind



《ジェリド湖(光と熱に浮かぶポートレート)》
(1979年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/28分)
Photo: Kira Perov



《はつゆめ》田中大圓へ
(1981年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/56分)
Photo: Kira Perov



《おのれは如何なるものを識らず》
(1986年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/89分)
Photo: Kira Perov

【日時】

2013年10月12日(土)、10月13日(日)
13:00 から A プログラム(冒頭に15分の解説付き)
15:00 から B プログラム

【会場】

国立国際美術館 B1 階講堂
入場無料/全席自由/先着130名(午前10時より各プログラムごとの整理券を配布/1名様につき1枚)
*各プログラム入れ換え制です。

【上映作品】

A プログラム(84分) :

《ジェリド湖(光と熱に浮かぶポートレート)》(1979年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/28分)
《はつゆめ》田中大圓へ(1981年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/56分)

B プログラム(89分) :

《おのれは如何なるものを識らず》(1986年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/89分)

【企画主旨】

「美術と映像」という主題に関して、多様な作品を上映会という形でご覧いただこうと、2011年3月に始まった中之島映像劇場。その第6回目は、世界的に著名なビル・ヴィオラの当館所蔵初期映像作品でプログラムを組みました。昨今の美術家による映像メディアの使用の広まりは、ビル・ヴィオラが大きく影響を与えていると考えられます。彼のビデオ映像作品を改めて見直し、「美術と映像」の現在と将来を考えることが目的の一つです。

しかし、この上映会の真の開催意図、それはビル・ヴィオラの世界の汲み尽くせぬ魅力を何度も味わいたいということなのです。

ビル・ヴィオラの映像作品の特質については多々指摘出来ますが、その一つとして「持続と変化」が挙げられます。しばしば彼の映像は時間を引き伸ばされ、いわゆるスロー・モーション状態になります。その結果、極く短い時間であっても、あ

たかも時間の顕微鏡でのぞいたかのように、通常の視覚では見逃してしまうようなものごとの変化が生じているのが見えてきます（もちろん、空間的な拡大鏡の役割も加わっています）。

森羅万象は巨視的にも微視的にも変化しつつ、かつ持続している——それは電子信号の絶えざる流れを基本とするビデオという表現メディアと根源的に親和している——ビル・ヴィオラの作品世界の背景となる一つの思想であると考えられるでしょう。

このようなビデオならではの特質を生かして彼が探求するのは、世界の現れとそれに対峙する人間の姿——そうした場を求めてビル・ヴィオラは世界各地を旅するのですが、同時にそれは自らに課した精神の探求にもなっています。このようなビル・ヴィオラが辿った心の旅路を、私たちは私たち自身で辿り直すことを要請されているのです。



ビル・ヴィオラ
Photo: Kira Perov

【作家紹介：ビル・ヴィオラ (Bill Viola)】

ビル・ヴィオラ (1951 年、ニューヨーク生まれ) は、シラキュース大学で絵画と電子音楽を学ぶとともに、ビデオによる作品制作に着手します。卒業後、現代音楽のデヴィッド・テュードアと出会ったことも、その後の彼の仕事に関して大きな意味を持っています。

1972 年、最初のビデオ映像作品を発表して以後、《聖歌》(1983 年) や《パッシング/死》(1991 年) などのビデオ作品を多数制作するとともに、《彼はあなたのために涙を流す》(1976 年) ほか数多くのインスタレーションも手掛け、ビデオ・アートの世界的な第一人者と評されています。

さらに 2000 年以降には「パッション/受難」シリーズが始まります。受苦を強いる様々な状況下での人間の行動(身振りや表情)が時間的に引き延ばされ、高精細度の液晶モニター上に表現されるのですが、その結果、作品を見る者の胸中に深い感情を呼び起こすものとなっています。

ビル・ヴィオラと日本との関係は非常に深く、1980 年から 1 年半滞在し、作品制作を行なう中で、日本の伝統文化と思想を学んでいます。その後もたびたび来日し、展覧会に参加していますが、とりわけ多数のビデオ・インスタレーション作品が展示された、1989 年の「第 3 回ふくい国際ビデオ・ビエンナーレ」が特筆に値します。最近では 2006 年から翌年にかけて森美術館(東京)と兵庫県立美術館(神戸)で開催された、大規模な個展、「ビル・ヴィオラ：はつゆめ」展が今も記憶に新しいものです。当館他で開催した「液晶絵画」展(2008 年)では、彼の初期の代表作《映り込む池》(1977-79 年)が出品されました。

【作品介绍】

A プログラム：

《ジェリド湖 (光と熱に浮かぶポートレート)》(1979 年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/28 分)

Chott el-Djerid (A Portrait in Light and Heat), 1979

Videotape, color, stereo sound; 28 minutes

ビル・ヴィオラは 1980 年から日本に長期滞在しますが、この作品はそれ以前に制作されたものです。アフリカの砂漠にある塩湖に出現する自然界の現象である蜃気楼と、それを捉える視覚の権化となった望遠レンズ——これらの相克の結果、朦朧とした、幻覚のような映像が生まれています。

《はつゆめ》 田中大圓へ (1981年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/56分)

Hatsu-Yume (First Dream), 1981

For Daien Tanaka

Videotape, color, stereo sound; 56 minutes

滞日の所産として制作された作品の一つで、禪の師であった田中大圓に捧げられています。日本の各所を回り、伝統と現代、山野と都市、光と闇などの光景を収録し、全てを流動する、水の流れのような時空間連続体の中に織り込んでいます。

B プログラム:

《おのれは如何なるものを識らず》 (1986年/ビデオ作品/カラー/ステレオ・サウンド/89分)

I Do Not Know What It Is I Am Like, 1986

Videotape, color, stereo sound; 89 minutes

1980年代後期、作家としての名声が高まっていく中で生み出された初の長編作品です。地球上に存在するのは人間だけではなく、動物も植物も無生物も生存しています。そうしたいわば生態圏において人間は何かという問いが発せられ、その生と死と転生という主題が扱われています。全体は5部に分かれています。いずれにおいても作家自身の揺れる眼差しが遍在しています。

これらの、テーマと作風を異にするビル・ヴィオラの3本のビデオ映像作品を通して、空間の拡張と時間の持続とを通して実現される、世界と人間との独自の遭遇を体験していただきたいと願います。

【中之島映像劇場】

国立国際美術館では1989年から映像作品の収集に取り組み、常設展示場で公開していました。近年、中之島に移転してからは定期的な上映会の形を取っています。さらに2008年には「Still/Motion 液晶絵画」展を開催し、絵画と映像とが交錯し合う現代の美術表現に光を当てました。さらなる展開を図ろうと、2011年の3月から「中之島映像劇場」と名付けました。メディアに立脚した、言葉の最も広い意味での「美術と映像」の歴史的な変遷を探り、現代の状況の解明を試み、さらには今後の動向をも予示出来ればと願っています。